

中野孝次

清貧の思想

中野孝次

清貧の思想



中野孝次(なかの こうじ)

大正14(一九二五)年、千葉県生まれ。東京大学文学部独文科卒。国学院大学教授を経て、小説、評論、随筆、翻訳と多彩な活動を続ける。主な著書に『ブリュッセルへの旅』『実朝考』『麦熟るる日に』『苦い夏』『本阿弥行状記』(以上河出書房新社)、『ハラスのいた日々』『はみだした明日』『リラの僧院』(以上文藝春秋)、『季節の終り』『自分らしく生きる』(以上講談社)、『わが体験的教育論』『今昔物語集』(以上岩波書店)など。

清貧の思想せいひんしつしやう

一九九二年九月十六日 初刷

一九九三年二月二十三日 三十一刷

著者 ©中野孝次

装丁 田村義也

発行者 加瀬昌男

印刷 精興社
表紙印刷 栗田印刷
製本 大口製本印刷

発行 株式会社

郵便番号 一五〇
東京都渋谷区神宮前四一二六二六
電話 〇三―三四七〇―六五六五
振替 東京七―二三五五二
乱丁・落丁の場合は、ご面倒ですが、
小社営業部宛にご送付ください。送料
小社負担にてお取り替えます。

Printed in Japan

ISBN4-7942-0477-9

まえがき

いま国外旅行をすると、どの国でも日本及び日本人に対する関心が高いように感じられる。むしろ理由の第一は、クルマ、電気機器、エレクトロニクス、時計、カメラなど、日本製品の大量進出にあるだろう。日本が非常に高度な工業技術と生産性を持つことはこれらの製品でわかるが、これを作った日本及び日本人とは一体いかなるものか、物は見えても人間の顔が見えないというのが、関心を高める理由になっているようである。実際わが国の政府は海外に対する自己宣伝を怠りすぎているから、そういう要求が起るのもっともだと思われる。

理由の第二は、しかしそれと相反するもので、逆に日本人の大量の海外渡航に由来するものようである。史上かつてなかったほどの数の日本人ツーリストが各地各国に出掛けるし、また企業の長期滞在者の数も少くない。かれらの行動をじかに見て「これが日本人か？」という疑問を抱く。その疑問は概して否定的な性質のものだが（本文第十六章参照）、それもまた日本及び日本人への関心を高める理由になっているのは皮肉である。日本人とはただホモ・ファールベル（物を作る人）であって、物を作って売るだけの者なのか、それ以外の文化を持たないのか、というわけだ。

それ以外にもまだ理由はあるだろうけれども、わたしが受けた印象ではほぼその二点によるよ

うであった。そして何かにつけて日本及び日本人について質問されるわけである。

わたしは話を求められるたびにいつも「日本文化の一側面」という話をすることに決めて来た。内容は大体日本の古典——西行・兼好・光悦・芭蕉・池大雅・良寛など——を引きながら、日本には物作りとか金儲けとか、現世の富貴や栄達を追求する者ばかりでなく、それ以外にひたすら心の世界を重んじる文化の伝統がある。ワーズワースの「低く暮し、高く思う」という詩句のように、現世での生存は能うかぎり簡素にして心を風雅の世界に遊ばせることを、人間としての最も高尚な生き方とする文化の伝統があったのだ。それは今の日本と日本人を見てはあまり感じられないかもしれないが、わたしはそれこそが日本の最も誇りうる文化であると信じる。今もその伝統——清貧を尊ぶ思想と言っていい——はわれわれの中にある、物質万能の風潮に対抗している。それは現代の日本の主たる潮流ではないからあえて「一側面」と遠慮しておくが、実はわたしはこれこそが日本文化の精髓だと信じているのだと、古典の詩歌を引きつつ、わたしの「清貧の伝統」と考えるところを話して来たのだ。

かつて明治時代に『日本及び日本人』という国粹主義の雑誌があり、戦時中の皇国主義的国粹主義の支配下に青年期を送ったわたしには国粹主義くらい嫌悪すべきものはなかったのに、そのわたしが齢をとってこうして結果的には、かれらと同じように『日本及び日本人』の宣伝をすることになったのは、これもまた皮肉な成行きであった。

ただ、講演では話がどうしても大雑把になる。充分に意をつくせぬことのほうが多い。話そう

と思っながら話せなかったこともある。またそれ以上に、話しているうちに自分の認識や知識の不充分さに気づくこともある。これはたんに外国人向けの日本文化案内には留^{とど}まらないのだ、自分自身のためにもっと正確に知り、認識を深めなければならぬ、と感じて来たということもある。

そういう気持が嵩^{こも}じて来て、いつかはこれを書くことで確かめておかねば、と思っていた。が、こういうことは内心で思っいても機会がないとなかなか実行できないもので、そのままに打過ぎていたところ、たまたま草思社からその話を書くようすすめられた。いい機会だと思っしたが、これもそのままにしておいた。ところが今年の正月元旦、何か書き初めをと思っ立って原稿用紙に向ったとき、ふとこれを書く決心がついて書き出したら、思いがけず自分でも興が乗って、以後毎日、他の仕事を全部放擲^{ほうてき}して書きつづけることになったのは、われながら驚きであつた。こんなことはわたしとしても初めての体験である。

「I」と名付けた十五章に書いたのは、わたしがそのつど話して来たこと、ないし話そうと思っながら充分に話せなかったことである。日本の読書人には周知の事柄で珍しくないこともあえて記してあるのは、話す相手が外国人だったためととっていただきたい。

そしてこの十五章でとりあげた話を材料としてかれらに何を訴えようとしたか、わたしがそれをどう思うかを記したのが、「II」と題した部分で、むろん主眼はここにある。これはあえて言えはわたしの祈りのごときものである。そうあつてほしいという話である。そのためにいささか美

化している向きもあるだろうが、それがわたしの念願であることには間違いない。

いま地球の環境保護とかエコロジーとか、シンブル・ライフということがしきりに言われだしているが、そんなことはわれわれの文化の伝統から言えば当り前の、あまりにも当然すぎて言うまでもない自明の理であった、という思いがわたしにはあった。かれらはだれに言われるより先に自然との共存の中に生きて来たのである。大量生産⇨大量消費社会の出現や、資源の浪費は、別の文明の原理がもたらした結果だ。その文明によって現在の地球破壊が起ったのなら、それに対する新しいあるべき文明社会の原理は、われわれの先祖の作りあげたこの文化——清貧の思想——の中から生れるだろう、という思いさえわたしにはあった。

一個の文士の夢と嗤うなら嗤え。わたしはそんな夢のような願いをもこめてこれらの話をして来た、ということだけが事実である。

●清貧の思想●目次●

I

- 一、心の内なる律を尊ぶ
本阿弥光悦と肩衝の茶入れ
10
- 二、慳貪にして富貴なることを嫌う
本阿弥妙秀の暮しと生き方
16
- 三、省みて疾しければ己れなし
本阿弥光徳、光甫の刀を見る目
26
- 四、三界は只心ひとつなり
鴨長明と方丈の庵
34
- 五、囊中三升の米、炉辺一束の薪
越後五合庵での良寛
42
- 六、独り奏す没絃琴
良寛、山中の沈黙行
54
- 七、数奇の心、数奇者のみが知る
鴨長明が讀えた芸道一筋の名手たち
58
- 八、つきてみよ、ひふみよいむなや
子供と遊ぶ良寛の内なる世界
65

九、池大雅の暮しと人となり
書画に一点の塵気なし 73

十、桃源郷に心を遊ばせる与謝蕪村
月天心貧しき町を通りけり 83

十一、蕪村、市井に住むことこそ己れの風流
大隠は朝市に隠る 89

十二、橘曙寛、雨の漏る陋屋に万巻の書
歌よみて遊ぶほかなし吾はただ 96

十三、吉田兼好の死生観とその普遍性
死を憎まば、生を愛すべし 106

十四、風雅に身を削る松尾芭蕉
一句として辞世ならざるはなし 116

十五、旅で死ぬ覚悟の芭蕉に見えた景色
野ざらしを心に風のしむ身かな 125

II

十六、清貧の思想——日本文化の一側面
利に惑ふは愚かなる人なり 134

十七、古代インド哲学と良寛の同質性
永遠の生と出会うために 141

十八、花を愛し孤独に耐えきる西行
さびしさに堪へたる人のまたもあれな

154

十九、清貧とは清らかで自由な心の状態
持つことと在ること

164

廿、自然の中のいのちの気配に耳をすます
うれし顔にも鳴くかはづかな

173

廿一、現実の無残な相をも直視する精神
骨もまた清からん

183

廿二、庶民に生き続けてきた清貧の思想
清く貧しく美しく

191

廿三、何が必要で何が必要でないか
誰人か足らずとせん

201

廿四、われらいかに生きるべきか
諸縁を放下すべき時なり

209

参考文献

221

わたしがこれから語ろうとする話は、日本でもいまではあまり聞かれなくなったが、たしかにかつてこの国に生きていた人たちの物語である。たんにそういう人たちがいたというだけでなく、かれらの生き方はいわば思想となって代々尊まれて来たのでもあった。それは一言でいえば、これもいまは廃語にひとしい言葉になってしまった「清貧」という語であらわすしかない「清貧の思想」ということになるが、抽象的にそれを語るよりも具体的に事例をもって示したほうがよくわかってもらえるのではないかと思うので、早速その話に入る。

本阿弥光悦と肩衝の茶入れ

一、心の内なる律を尊ぶ

まずあの本阿弥光悦ほんあみみつえつ（永禄一一五五八〜寛永十四一六三七）のエピソードから始めよう。

光悦はいまでは書と、黒染赤染の茶碗と、船橋の蒔絵まきゑなどでばかり知られているが、この人が生涯にわたって最も好んだのは茶の道であって、彼は当時茶人としても有名であったのだ。光悦をよく知る文人灰屋紹益はいやしようえき（慶長十五一六〇九〜元禄四一六九二）は、千利休亡きあと今の世に茶の心を深く知る者は太虚庵光悦たいしやんみつえつぐらいのものかとさえ言っているほどである。もっとも彼の茶道についての考えは利休とはだいぶ違い、利休に対しては大いに批判的だったが、若い時はしかし彼もずいぶん道具に凝ったようで、これはその道具執着についてのエピソードである。

光悦がまだ若かったころのあるとき、小袖屋の宗是という者が持っている瀬戸肩衝の茶入れを一目見て、ぜひとも手に入れたいと願うほど惚れこんでしまった。が、なにぶんにも値が高い。黄金三十枚というのは今の金にしてどのくらいか、とにかく手も出ない大金で、光悦にはとうてい金策のメドが立たない。しかし道具というものは一度欲しいとなるとますます執着が募るものである。光悦は何が何でも手に入れたいと苦慮した。

光悦の執着と金策に苦慮するさまとを見て宗是は気の毒に思い、それではまけて進ぜようと申し出た。が、ここが光悦の光悦たるところで、まけてもらうのはいやだと断った。この瀬戸肩衝の茶入れは天下の宝であって、黄金三十枚の値は充分にあるものである。それをまけてもらうわけにはいかぬと断り、とりあえず住む家を黄金十枚に売り払い、さらに人から二十枚借りて、初めの言い値どおりの値段でついにそれを手に入れたのであった。

このころは織田信長、豊臣秀吉と二代にわたって茶道具を尊び、道具を知行の代りにしていたくらいだから、茶道具は特別に宝とされた時代である。また千利休は一品でもよい宝を持ってふだんから使うことをすすめたので、茶の道に志すほどの人は誰でもこんなふうにかなり無理してでもいい物を持ちたかったのだ。

光悦も新しく手に入れた茶入れが自慢で同好の士に見せたくてならなかったのだろう。この小袖屋の茶入れによい茶を入れて前田の殿様にお目にかけるに出かけた。

本阿弥はもともとが刀の研ぎ、目利き、磨きを家業とする家で、この道では天下第一の家とさ

れ、代々多くの大名家にかかわりがある。わけても加賀の前田家との縁は深く、光悦の父光二のころから利家卿に扶持を貰っていたほどで、それは利家の子利長卿の代になっても変らず、光悦も利長卿を初め前田家の家臣とも日ごろ付合いが深かったから、こうして気軽に自慢の品を見せにいったものと思われる。

前田家も代々茶の道に心を入れることの深い家柄だ。はたして光悦がその茶入れに茶を入れていって茶を点でて進ぜると、殿様は大いに気に入られ、さてさてそなたはよい茶入れを見つけたものかな、と御機嫌であった。

殿様の御機嫌もよく、上首尾にほくほくして光悦が帰ろうとしたときであった。横山山城守を初めとする家老の面々が光悦を呼びとめ、書付けを示して、その茶入れ、殿様は殊の外にお気に入られた御様子である、白銀三百枚にてお譲りいたせと言う。しかし光悦はそれを断った。これは御当家より戴く扶持を年来貯えておいて買いためたものでありますゆえ、お目にかけてただでござりまする、売り買いのため持参したのではありませぬと言って、家老たちが代る代る叱ったけれども決して承知しなかった。

暮方に親の家に帰って、本日はこれこれしかじかにて殿様の御機嫌もよく上首尾でございましてと報告し、さらに帰りがけに御家老たちが白銀三百枚を下されようと言いかけたとたん、母親の妙秀（一五二九元和一四）がキツとなって、そなたその銀を拝領して来たのか、と咎めた。そこで光悦がそうはしなかった旨を段々に説明すると妙秀は機嫌を直して、

「よくぞお返し申しあげた。もしその銀子を拝領したならばせつかくの茶入れもすたれものになり、そなたは一生茶の道をたのしむことが出来なくなつたであろう。よくぞお請けしないで来た。」と大変な悦よろこびようであつた。

この話は『本阿弥行状記』という、本阿弥一族の行跡を記した本に載っているが、いかにも氣持のいい話で、妙秀という人の物の考え方、光悦の心持がよく察せられるのである。利得というような念は毛頭なく、もっぱらいい品物を手に入れてただそれゆえによるこんでいたのだ。もし茶の道の道具に利得がからんだならば、その道具も、さらには自身の茶の道もすたれる、茶の道をたのしむことが出来なくなると、ひたすら心のありようだけを重視したのである。本阿弥の家は商家であるけれども金銭にとらわれず、心の内なる律を尊んだことがこの話からも知られる。

小袖屋の茶入れを、宗是がまげようと言つたのに断つて光悦が元値で買ったという話は、すぐに京中にひろまつたらしく、その話を聞いたほとんどの人が「氣違い沙汰だ、バカなことをしたものよ」と嘲つた中で、光悦の所業をほめたのは徳川家康ひとりだといわれている。家康は光悦のそういう心情を愛していたのだ。

小袖屋の肩衝の茶入れに関するこのエピソードを見るかぎりでは、光悦も道具に執着する茶人の一人だつたようで、事実若いころはそうであつたに違いないけれども、灰屋紹益のちに『にぎはひ草』という本に書いているところによると、あとではそうでなくなつてゐる。紹益は幼い時分から光悦のそば近くにいて、光悦に愛されることずいぶん深かつた人だが、彼はこう言つ

ているのである。

みづから茶をたて、生涯のなぐさみとす、人のぞみ好む道具なども、しばらくは持たる事有けれども、おとすな、うしなはぬやうになどいふ事、いとむつかしとて、みなそれなくにとらせて、後人のほしと思ふべき物なかりし。

名物は、それが名物なればなるほど「やれ落とすな、やれ失くすな」とそれに心をとられ、心の平安を失わせる。そんなものに心を乱されるくらいならいっそ持たぬにしかぬと、みな人によってしまつて、おのれはごくふつうの雑器で茶そのものをたのしんだというのだ。光悦の心掛けがよくわかる話である。

紹益はさらにこうも言っている。

光悦は、よをわたるすべ一生さらにしらず、若かりし時より、物の数を合するものゝたぐひ、おもしろしとするものゝたぐひ、一生我家の内になし。金銀手にのせたる事、昔、加州の大納言、直に判金を給ければ、手にとりていたゞきたると覚たり、其外一度も手に持たる事なし。

身すぎ世すぎのために金を稼ぐようすべは一生まったく知らなかった。金勘定をする算盤と